

城の崎にて (志賀直哉)

一 作者と作品について

志賀直哉（一八八三—一九七二）は、宮城県石巻に生まれた。学習院中等科六年の時、足尾銅山鉱毒事件をめぐり父と衝突、父との不和が始まる。一九一〇年、新しい文芸同人雑誌『白樺』が作られた。有島武郎や里見弴などの同人と共に「白樺派」と呼ばれ、人間の生命の力を信じる理想主義・人道主義の立場をとった。このころ、『大津順吉』『清兵衛と瓢箪』などの作品を執筆した。

結婚問題などから一九一二年に、志賀直哉は東京を離れ、広島県尾道に行った。この時期に、父との不和を扱った長編『時任謙作』を書き始める。一九一七年に父との不和が解けると、多くの作品が発表されるようになる。『城の崎にて』『小僧の神様』『焚火』などがこの頃に執筆された。また、内村鑑三のもとでキリスト教を学んでいる。

「城の崎にて」は、大正六年五月『白樺』に発表された。父との不和を描いた『時任謙作』（『暗夜行路』の前身）の中絶以来、創作を再開した最初の作品である。「城の崎にて」について志賀直哉は「これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、ゐもりの死、皆その時数日間に実際に目撃したことだった。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生まれた心境ではなかった」（『創作余談』）と記している。



田中 大樹、谷口 唯、安福 佳奈、水上 志織



余裕を否定しているのは三つの小動物の死を通して志賀直哉が自己の生死の問題に直面し、見定めようとしているからである。

志賀直哉にとって城崎での体験（大正二年秋）がいかに印象深いものであったかは、作品として描かれるまでに三年余りを隔てていることからうかがえる。

二 叙述について

山手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に、一人で但馬の城の崎温泉へ出かけた。

主人公の状況が伺える第一文である。「山手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、」の部分が読点になっているのはなぜか。句点であった方がいいはずのこの部分をあえて読点にしているのは、事故に注目させるのではなく、城の崎へ行ったことに着目させる効果があると考えられる。「養生」とは、「生命を養うこと」である。ちなみに「療養」は病気を治すため治療し養生すること。怪我をしている主人公であれば、「療養」がふさわしいと考えられる。「養生」とあることで、怪我を癒すだけでなく、彼自身の人生感を顧みて、生死について考える筆者の心情を表す言葉としてとらえられる。

怪我を負っているにもかかわらず、東京から城の崎へ出かけること

がとても不自然である。この部分から、主人公に養生を勧めた人々は、単なる怪我の治癒だけを目的にしているのではなく、主人公に心の休養も必要であると考えたのであろうか。

三週間以上―我慢できたら五週間ぐらいいたいものだと考えている。

「我慢できたら」というのは何に對する「我慢」なのか。結果的に、城の崎には三週間しかいなかったことから考えると、主人公は「我慢」できなかったようである。おそらく主人公は一人で養生するということに対して退屈であるということがある程度予想できたのであろう。よって、「退屈」に對する我慢であると考えられる。

イネの穫り入れの始まるころで、気候もよかったのだ。

「イネの穫り入れの始まるころ」とあるので、養生に來たのが秋の一〇月中旬であるということが伺える。気候もよく、養生にはよい時期にやってきたということがわかる。

ひとつ間違えば、今ごろは青山の土の上に仰向けになって寝ているところだったと思う。

この部分から、主人公一家は土葬で埋葬されている、つまりキリスト教であるということがわかる。「寝ている」という言葉を用いたのはなぜか。この部分は「死んでいる」「埋められている」でもよい所を、死の表現に「寝ている」という穏やかで静かな人間の生を感じる表現を用いている。このことから、作者は「生死」の区別が曖昧で、死を恐怖としてとらえず、生の延長として考えている様子が伺える。

青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのまま、祖父や母の死骸がわきにある。

「青い冷たい堅い顔」と形容詞を三つつなげ、見た目から手触りへと深め、徐々に近づくように表現していることで、死体としての顔の様子をリアルに表現している。「そのまま」とすることで、「顔と背中の傷」がそのままであるということ客観的に描くことにより読者に想像させる効果が伺える。

「死骸」と露骨に表現することによって、死んでいるものをダイレクトに表す。自分の死は生の延長だが、祖父母「もの」のようにとらえているのは、死んでいるものは事実としてとらえている。

それは淋しいが、それほどまでに自分を恐怖させない考えだった。

「それは淋しいが」の「それ」というのは、「ひとつ間違えばよくこんなことが思い浮かぶ。」の部分であり、彼自身の死に對して「淋しい」と感じている。しかし、「淋しい」とは「恐怖」ではなく、むしろ「恐怖させない」と表現していることから、主人公は死から恐怖を感じられないことがわかる。

自分の心には、何かしら死に對する親しみが起こっていた。

「起こる」という表現から「親しみ」は何もなかったところから生まれた感情であり、事故後に「死」というものが自分と近いものとなったということがわかる。つまり、この時点で、事故を体験することによって「死」が身近な存在となり、「死」について深く考えるようになったということがわかる。

「何かしら」という表現から、主人公はこの「親しみ」の根源が何

なのかをこの段階では理解できていないということがわかる。

それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。

「いかにも」はぴったりという意味がある。「いかにも」という表現がこの近辺で多用されている。「忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きていく物という感じを与えた。」「そのわきに一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずに俯向きに転がっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを与えるのだ」

「いかにも」と同時に「感じを与えた」という言葉がセットで出てきている。このことから、生死に対する印象を客観的に表現している。主人公が感じた印象ではあるが、その印象はあくまでも普遍的であるということ強調する要因となっている。

淋しかった。

前文は客観的に表現されているが、この部分は主観的である。蜂の生死について自分の印象は「淋しい」といつている。

しかし、それはいかにも静かだった。

「いかにも」感じを与えた」から脱却している。客観視が続いてきたが、この部分は主観的な表現である。「寂しかった」という表現よりも、「静かだった」という表現の方が、言いたい表現に適用される。

今までの部分を整理すると、主人公は蜂の生死を客観的に考えるところ「静か」ではあるが、主観的には「淋しい」といつている。どちらも視点は違うが同じ主人公の考えであることから、「静か」と「淋しい」は一体のように感じるが、「しかし」という逆接から、「静か」といつ

表現がぴったりであるということ強調している。

せわしくせわしく働いてばかりいた蜂がまったく動くことがなくなったのだから静かである。

「働いてばかりいた」ことが「動くことがなくなった」ということから、生と死の対称は動と不動の対比としてとらえていることがわかる。

「せわしく」を重ねたのはなぜか。「せわしい」とは忙しい、せかせかしている、事が多くて暇がないという意味である。同じ言葉を重複することにより、生きていく間ずっと働くことだけをせつせとやってきた様子が伺える。つまり、「せわしく動く」ことが「生」としてとらえられる。

「動くことがなくなった」と表現したのはなぜか。「動かなくなった」でもよい所をあえて「動くことがなくなった」。「せわしく動く」ことが「生」としてとらえられるならば「動く」ことが「なくなる」ということは、つまり「生」がなくなるといつことがわかる。

自分はその静かさに親しみを感じた。

「その」といつるのは「死」のことである。最初は「自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。」といつているが、「起こっていた」から「感じた」に変わっている。つまり、死の何に親しみを感じるのかわからなかったが、「静かさ」への親しみであるといいつことが明確なものとなった。

顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情に、それが一生懸命であ

ることがよくわかった。

「動作の表情」という言葉で、鼠の動きの様子だけではなくその懸命さ、感情や心情を表現している。「人間」と書くことで、周りで唯し立てる人間たちを客観的に批判している。

子どもや車夫はますますおもしろがって石を投げた。

子どもにまじって大の大人である車夫が混じっていることが不自然である。「車夫」とは人力車を引く男である。残酷な大人である。ここでの文章中の「車夫」の役割を考えると、生死について深く考えることがない人間の姿を投影していると考えられる。

自分が希(ねが)っている静かさの前に、ああいう苦しみのあることは恐ろしいことだ。

「希っている」はなぜ「願っている」ではないのか。「希う(ねがう)」とは、めったにないことをあつて欲しいとねがうことである。「希っている」静かさは、人生に一度しか訪れることのない「死」であるということを強調している。

「ああいう苦しみ」とは、死ぬと決まった運命を担いながら全力を尽くして生きる努力をせざるを得ない、そのような心理状況に陥ることが「苦しい」といつていると考える。

しかもこの傷が致命的なものかどうかは自分の問題だった。

この部分は、一つの解釈に絞ることが難しい。そこで、二通りの解釈を挙げる。

①自分の「行動の」問題だった。主人公は、「半分意識を失った状態で

一番大切なことだけによく頭の働いたことは自分でも後から不思議に思っただけである」といつている。傷が致命的なものかどうかは、このような状況にありながら、自分自身で対応ができたかできなかったかということが関わっていた、という意味で、「自分の問題だった」といつている。「しかも」とある点から、前文からの添加と考えても、この考えは有力である。

②自分の「運命の」問題だった。どんなに努力しても、致命的かどうかというのは、自分自身ではどうしようもないことであり、自分の運命の問題であるということ。

しかし、致命的のものかどうかを問題としながら、ほとんど死の恐怖におそわれなかったのも自分では不思議であった。

この部分は主人公が電車にひかれた直後の出来事を回想しているところである。主人公は事故が起こった後に死への親しみが生じた。電車にひかれた直後を思い返してみると、自分の負った傷が「致命的かどうか」は気にしていたが死ぬことへの恐怖はほとんど感じなかった。普通は「致命的かどうか」を気にするということは、生死に関わることを案じているのである。つまり、死にたくないから「致命的かどうか」を気にするのである。しかし、主人公にとってはひかれた時点で「死」は恐怖でないというふうに感じていたのだ。この部分は死への親しみが起こる前の主人公の「死」の捉え方に自身で気づいた部分と考えられる。

で、またそれが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分が希うところが、そ

かも（「死に対する恐怖を感じない」と「なんとなく助かりたい」という）両方が本当（に思うこと）で、影響した（その思うことが影響して生きる事が出来た）場合は、それでよく、しない（影響しなくて死んでしまった）場合でもそれでいいのだと思っただけ」となる。

そうしたらその動く葉は動かなくなった。

「そうしたら」は前文をさす。ここでは「風が吹いてきた」すると「その動く葉は動かなくなった」。葉は生きているものを表している。その生きているものが風が吹いたことによって動かなくなったということは、生きているものの生命が何らかの要因によって絶たれたことを表していると考えられる。

何かでこういう場合を自分をもっと知っていたと思っただけ。

「何かで」とあるので、具体的には自分では思いついていないが、動いているものが動かなくなるという状況をこれいがいにもっと知っていたということが分かる。この部分は自分の事故や蜂、鼠などの生死と重ねて表現しているのではないだろうか。

いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がなっていない心持ちを感じた。

ここでは二つの「心持ち」が出てきている。「心持ち」は、①物事を見聞き、何かを感じ取った心の状態。②気持、気分、心地。

一つめの「心持ち」は、「いもりと自分だけになった」という心持ちである。意味的には①の意味でとる。いもりは実際死んでいるのでこの空間では主人公一人なのだが、その空間にいもりと自分が二人きり

になったような感覚が感じられる。とても静かなイメージである。

二つ目の「その心持ち」は、不意に死んでしまったいもりの心持ちである。②の意味でとれる。自分をいもりに重ねて、いもりとの心的距離が縮まっている。主人公は「好きでも嫌いでもない。しかし自分がいもりだったらたまらない」と表現しているので、そのようないもりと自分を重ね合わせるほど接近している。



かわいそうに思うと同時に、生き物の淋しさをいっしょに感じた。

「かわいそうに思う」と書かれているが、自分が殺してしまったということよりも偶然に死に至ったということが「かわいそう」といっているあたりに、主人公が「偶然の死」に対して考えているということが分かる。「生き物の淋しさ」とは、人間も含む生き物の生死のあつげなき、自分の意志とは関係のない「偶然」に生死がゆだねられているということと考えられる。「いっしょに」はなぜあるのか。前に「同時に」とあることから、この「いっしょに」には「かわいそう」と「淋しさ」が両立していると考えられる。

生きていることと死んでしまっていること、それは両極ではなかった。

「生きている」は現在進行形であるが、「死んでしまっている」と現在完了形で表現している。ここを「死んでいる」ではなく、あえてこのような表現をとったのはなぜか。「生きていること」は偶然であり、「死んでいる」ことが偶然とは不自然な感じがする。「死んでしまっ

いる」ことが偶然、というニュアンスには、感情が含まれる。生きていたものが「死んでしまった」その淋しさを主人公が感じ取っているように考えられる。そして、生死は相反する物ではなく、「偶然という運命」に委ねられているという点で両極ではない、紙一重なものであるということが考えられる。

自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。

「なるだけは」とあるので、脊椎カリエスにはならなかったが、偶然によってそれが免れただけで、またいつ死ぬか分からない、生と死が隣合っていることには変わらないということの主張であると考えられる。また、「助かった」という点において、やはり生きていたいという主人公の本音が感じられる。

三 考察

(一)「城の崎にて」における志賀直哉の自己投影

「城の崎にて」は、蜂、鼠、いもりなどの動物を通して生死についてを考える主人公の物語である。実際、この主人公は作者志賀直哉本人であり、事故の後養生として城の崎を訪れた際の実際の出来事を綴ったものである。本文中には、志賀直哉が事実として描いた中に、自己投影と考えられる部分がいくつかあるので考察する。

せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全くうごかなくなったのだから静かである。

今まで働き動くことだけをしていた蜂が、死ぬと全く動かなくなっ

た。だから静かである。ここには、事故にあった志賀直哉自身が投影されていると考えられる。事故以前は作品創作や雑誌発行など、仕事に勤しんでいた。つまり蜂と同じ状況である。それが、城の崎で養生し、仕事のしがらみから解放された結果、「何もしなくなった」つまり、「動かなくなった」自分の状況を蜂に照らしあわせて表現したと考えられる。「死んだのである」ではなく、「静かである」と表現されているのも、作者が「死」に感じる「静かさ」は、死だけではなく、自身の状況が「静か」な状況であるということに投影できると考える。

風もなく流れの他は全て静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。

この部分の表現から、「葉」だけが異質である。周りが静寂なものにも関わらず、葉だけがせわしく動く。ここにも志賀直哉の自己投影が伺える。周りが静寂、つまり周囲が皆同じ状態であるにも関わらず、葉だけが周囲とは違う様子である。この部分から、周囲とは少し違う志賀直哉自身の孤独な心境が伺える。

志賀直哉の人生を振り返ると、父との確執やキリスト教の呪縛などに悩む。普遍的に「正しい」とされていることが、志賀直哉にとっては苦痛であった。そのような「正しさ」との心理的な葛藤の中で、作風である「自然主義」が確立されていく。周りと自分の違い、その異質性がこの一文に投影されていると考えられる。

十年ほど前によく蘆ノ湖でいもりが宿屋の長清水の出るところに集まっているのを見て、自分がいもりだったらたまらないという気をよく起こした。

なぜ「自分がいもりだったたらたまらないという気」がよくおきたのか。「集まる」というところに着目すると、周囲と同調せざるをえない状況で、自身がいもりだったらそこに同調しなければならぬ。それは自分には「たまらない」と表現しているのである。周囲と自分の異質性、周囲に同調することに嫌悪する志賀直哉の自己投影であると考えられる。

「城の崎にて」はただ事実や所感の羅列をしてあるのではなく、志賀直哉本人の心的状況を垣間見ることができ、そして、志賀直哉の複雑な心境を、自己投影として表現しているのではないだろうか。

(二)「城の崎にて」の文体について

志賀直哉の文章は一般的に、短く簡潔で無駄がないと言われている。事実、「城の崎にて」の文章も簡潔なものが多く、読みやすい。さらに、客観描写が多く、かつ的確で読んでいて情景をありありと想像できる。本稿では、この志賀直哉の文体のうち主語を取り上げ、どのような特徴があるのか、どのような表現効果があるのか考察する。

「城の崎にて」を読んでいて情景をありありと想像できることは、どのような文体的特徴に由来するのか。たとえば冒頭を見てみよう。冒頭で気づくのは、一人称主語が少ないということだ。「自分はよくけがのことを考えた」まで「自分」という一人称主語は出てこない。それまでは客観的事実を描写している。自分の感情を書く際も、感情を主語にして客観的に描写している。

対象を追い、事実のみを描写すると、読み手は情報を受け取りやす。自分が実際に見ているような印象を受けるからだろう。先にも取り上げたが、「それは見えていて、いかにも静かな感じを与えた」では、

主人公が「静かな感じを受けた」と書かないことによって、読み手自身がその対象（ここでは蜂の死骸）を見ているような感覚になる。そのような表現が随所に見られる。

一転して「自分は」という一人称主語が多用される箇所がある。鼠を見てから自身の死について考える部分だ。「自分は」と書かれることで、それまでとはちがって、主人公の切羽詰まったようすがありありと伝わってくる。書き手が自分と作中の主人公とを客体化できていないためか、少し読みにくくなる箇所でもある。書き手の感情が対象（この場合は作中の主人公）に近すぎて、読み手に伝わりにくい部分を自分ばかりからといって省略してしまっているためと考えられる。省略を味わうことが文学を読む愉しみのひとつではあるが、本作では不親切な省略が多い。とても名文とは言えないような文もある。作者が思考をうまく客体化できていない印象を受ける。

以降、後半のいもりの部分では「自分は」という表現が多く見られる。ここでは特に「自分は」と「いもりは」を交互に書くことで視点が次々と入れ替わり、読んでいて主人公といもりが重なっていく印象を受ける。冒頭ほど客観的でなく、中盤ほど主人公に近づきすぎず、三人称の小説を読んでいるような気にすらなる。

以上のように、主語を取り上げて表現効果に注目してみた。場面や状況により表現を巧みに使い分けることによって、読み手が受ける印象をコントロールしていることがわかった。短い作品（教科書掲載用に原文よりさらに短くなっている）ではあるが、表現の工夫が随所に見られ、読みごたえがある作品だと言える。主語以外の文体の特徴に注目してみてもおもしろいだろう。